地域創造コース基礎ゼミ報告（2022年度）
実践的教育で育まれる“地域学”―自然を糧にする営みに学ぶ

村田 周祐・塚本 莉奈・坪井 悠佳・デヂンルーカス龍輝・西田 こころ・
端野 克哉・橋本 麗佳・藤井 純也・逸見 舞翔・諸道 竜馬・米花 海輝

Regional Studies Created Through Practical Education:
Learning from Natural Sustenance Activities

MURATA Shusuke, TSUKAMOTO Rina, TSUBOI Yuka, DEDIN Lucsa Ryuki,
NISHIDA Kokoro, HASHINO Katsuya, HASHIMOTO Reika, FUJII Jyunya,
HENMI Maika, MOROMICHI Ryouma, YONEHANA Kaiki

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第19巻　第3号　抜刷
REGIONAL STUDIES（TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES）Vol. 19 / No. 3
令和５年３月27日発行　March 27, 2023

地域創造コース基礎ゼミ報告（2022 年度）

実践的教育で育まれる“地域学”—自然を糧にする営みに学ぶ

村田周祐*・塚本莉奈**・坪井悠佳**・デヂンルーカス龍輝**・西田こころ**・
端野克哉**・橋本麗佳**・藤井純也**・逸見舞翔**・諸道竜馬**・米花海輝**

Regional Studies Created Through Practical Education:
Learning from Natural Sustenance Activities

MURATA Shusuke*, TSUKAMOTO Rina**, TSUBOI Yuka**, DEDIN Lucsa Ryuki**,
NISHIDA Kokoro**, HASHINO Katsuya**, HASHIMOTO Reika**, FUJII Jyunya**,
HENMI Maika**, MOROMICHI Ryouma**, YONEHANA Kaiki**

キーワード：実践的教育，地域連携，農業，林業，漁業
Key Words: Practical Education, Regional Cooperation, Agriculture, Forestry, Fishery

Ⅰ．本稿の意図と内容

本稿の目的は，実践的教育としての「地域学」を記録することにある．超学際としての「地域学」の側面，つまり座学のための座学でも，実践のための実践でもなく，両者を有機的に結びつけていく地域学の記録である．具体的には，2022（令和 4）年度後期に地域学部地域学科地域創造コース 1 年生を対象とした「基礎ゼミ（村田）」の記録である．

近年の地域課題は総じて「オバーユーズ」から「アンダーユース」へと移行している．例えば，第一次産業をめぐる地域課題は「担い手過多から担い手不足（土地不足から土地余り）」へと移行し，「耕作放棄農地」「間伐遅れの林地」「放棄漁場」として顕在化している．しかし，こうした現象を統計データで示し形式的な学びを提供できたとしても，その地域問題の「内実」に触れる学びを提供することは大変に困難である．例えば一般的に農業は，技術としての農業を圃場で実習として学び，地域課題としての農業を座学として学ぶ．この専門領域も時空間も分断された学びを，有機的に結び付けで学生に提供することが非常に困難だからである．そこで本授業では，「自然を糧にする営み（農・林・漁）」の現場に身体を没入し，実践者と協働するなかで地域課題の内実を「知る」から「分かる」へ転換させる実践教育を目指した．そのうえで，地域学の基本的な視点（柳原 2011）における，生活の視点，わたしのいまここからの視点，歴史的視点（時間的想像力），移動の視点（空間的想像力）を意識しながら，学びを文字化することに試みた．

本授業では「自然を糧にする」を全体テーマに設定したうえで，講義内容は外部講師らが独自に展開，全体コーディネートは村田が担当した．新型コロナ禍での安全確保のために，それぞれの活動への参加学生の人数制限を行った．以下が本授業の概要と講師一覧である．

【林業】
・鳥取県智頭町：赤堀農林代表　赤堀宗範
・鳥取県智頭町：（株）Try’s 代表　橋本登志郎
・鳥取県智頭町：（株）小谷林道　小谷洋太
【漁業】
・鳥取県青谷町：鳥取県漁協夏泊支所
【農業】
・鳥取県智頭町：森のうまごや代表　岩田和明

以下が，地域との実学教育のなかで生まれた「地域学」の成果である．

*鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース
**鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース・1 年生

Ⅱ．学びの記録

1．とりあえずやってみる

デヂンルーカス龍輝

1-1）とりあえずやってみる

私は 10 月から 11 月にかけて農業，漁業，林業のフィールドワークに参加し，多くの方のお世話になった．フィールドワークに参加する前に私は，指導してくださる方々が学生のために時間を割いてくださっていると感じ，その時間を無駄にしないように，様々な体験を「とりあえずやってみる」というのを心がけた．結果的には，その心がけによって初めて見えた世界や学びが多くあった．

1-2）馬との対話

馬耕は文字通り「馬」で「耕す」米作りであり，コンバインなどの機械を使わない“オイルレス”な農業でもある．そこで私は初めて，わらで稲を束ねる方法，足踏み脱穀機と選別機の使い方，犂を使った馬耕を主に体験した．その中でも１番おもしろかったと感じたのは犂を使った馬耕だ．

写真１　犂を使った馬耕

犂を使った馬耕は，まさに馬との対話であった．馬は理性ではなく本能で動いているかもしれないが，馬の進行方向や進むスピードなど，馬の次の行動を予感するという対話の繰り返しだったのだ．そのため馬のスピードに合わせ犂の左右のバランスを取りながら耕すため，馬と対話し続けることが重要であった．さらに，私は馬の操作を体験することもできた．

写真２　馬の操作

馬に器具が取り付けてあり，その器具につながった紐を後ろから引っ張ることで馬の方向転換をする．犂を使った時とは少し異なった．犂を使ったときは馬の動きに自分が合わせていたのに対して，馬を操作したときは馬の動きを自分が操作して方向づける感じであった．犂を使った時と馬を操作した時の２つを通して，馬と心が通じ合う馬との一体感を感じ，非常に楽しさを覚えた．

1-3）命を頂く

私は，山の中で育ったため，漁業には全く関わったことがなかった．そのため，漁船に乗ることも魚を取ることも初めてであった．そんな初めての世界の中で特に印象深かったのは，魚を捌いたことだ．

写真３　三枚おろし

私が行った日は，運悪く漁獲量が少ない方であったという．そのため終わった時間が早くなったため，村田先生の提案で漁師さんからもらった魚を１人１匹捌くことになった．私はそれまで魚を捌いたことはなく，魚を捌くための出刃包丁も使ったことはなかったため上手くできるか不安であった．先生の見本とアドバイスで，三枚おろしに挑戦し，命を頂くため自分を信じて出来る限りのことをした．例えば三枚におろすとき，魚の背骨を身とうまく分けるために，パキパキという音が聞こえるぐらい包丁を入れることや，皮をはがす際，無駄にしないように薄くすることを心がけながら最後は自分の力を信じてはがすことなどである．結果，うまくできていると先生に褒められた．そして，刺身にして一緒に参加していた人とおいしく頂いた．

1-4）体の一部のように扱う

林業では，山の恵みや彩り，さらには山との暮らしの観点から学びや経験を得た．例えば，木の高さや山や木の見方，花木の種類とその花木の出荷調整，伐倒の瞬間の地響きなどである．そのなかでも衝撃に残っているのは，チェーンソーの重さである．

写真４　伐倒の瞬間

私たちは実際に木が倒れる瞬間を目の当たりに

した．そして私たちはその伐倒された木を，チェーンソーを使って切る体験をさせてもらった．それまで私はチェーンソーを見たことがあったが，持ったことはなかった．実際に持ってみると，両手でしっかりと持たなければいけないほどの重さを感じた．そして伐倒の際は，チェーンソーの刃を水平・平行を維持した状態で木を切っていかなければならないのだとそこで初めて気づかされた．また，実際に木を切ってみたとき，刃を木に当て，チェーンソーの刃を手元のボタンで動かすだけで，何もしなくても勝手にチェーンソーが進んでいく感覚を覚えた．それはまるで，チェーンソーが体の一部であるかのようなものだった．あの時の衝撃や感動は，私にとって忘れられないほど大きなものだった．

2)初めて見えてくる世界

これまでのフィールドワークを通し，私はそれまで自分が見たり聞いたりして想像していた世界とは異なる，実際に体験してから初めて見えてくる世界を確かに感じた．

フィールドワークで「とりあえずやってみる」を実践したことで，その実践が上手なものであれ下手なものであれ，自分の経験となることを知った．そしてその経験から次どうすれば巧くできるかが体感的にわかり，もう一度挑戦するときに，失敗することを恐れなくなる．さらに，指導してくださった方々が普段行っていることを体験することは，その方々の価値観や考えなどに触れることができ，私に新たな世界を見せることにつながっていく．

ここで一つ言葉を紹介したい．それは「両忘」である．両忘とは，物事を比較で考えずに，本来の目的や本質から考えようという禅の言葉である．非常に抽象度が高い言葉だが，つまり私たちは相対的に物事を考えがちで，よくない状態からより良い状態を目指すが，上手いや下手などといった対極する概念は本来どうでもいい，ということを言っている．

まさに，今回の「とりあえずやってみる」は両忘という言葉に当てはまると考える．これまでの自分は，挑戦して失敗することを恐れていた．上手くいかなかったときの恐怖などを感じ，受け身な態度をとるときもあった．しかし失敗への恐れは本来どうでもよく，さらには貴重な体験を無駄にする．そして私は見たり聞いたりするだけではなく，自発的に様々なことに挑戦することの重要性を「とりあえずやってみる」ということから学んだのだ．

3)挑戦する

「とりあえずやってみる」ことを通して，私は失敗を恐れずに挑戦することの重要性を学んだ．

それは，指導してくださる方々の価値観や考えなどのより詳しい部分まで触れることができ，そこで初めて見えてくる世界があると学んだからだ．また，両忘という言葉から，失敗への恐れは貴重な体験を無駄にするため，上手い下手関係なく挑戦することは生きていくうえで重要であると私はこれまでの体験を通して学んだ．

そして失敗を恐れずに挑戦することの重要性に気づけるきっかけとなった指導してくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいである．私はそんな方たちへ，失敗を恐れないで様々なことに挑戦する気持ちを持ち，それを私自身の生きていく糧として，より多くのことを学んでいくことで恩返しとしたい．

2.“好き”を貫く

逸見舞翔

1)きっかけ

「大好きな地元，鳥取でずっと暮らしたい．どうせなら，将来鳥取に貢献できるような仕事をしたい．そのために鳥取のことをもっともっと知りたい．」そんな思いで，地域におもむくフィールドワークが充実している鳥取大学地域学部に飛び込んだ．でも，自分がやりたいことがはっきりとは見えてこないまま前期が終わってしまった．

わたしは，何のためにこの大学に来たのだろう？わたしは何を学ぶ必要があるのだろう？そんな曖昧な気持ちを抱えたまま，「フィールドワークか…．面白そうだな．」という理由だけで，基礎ゼミでは村田先生の授業を選択した．

2)不安

初日，全国の中でも田舎だ，田舎だといわれる鳥取で生まれ育ったわたしも，「田舎だな…」と思ってしまうような山の中に連れていかれた．辺りは，山，田んぼ，畑，用水路，民家が少々．絵に描いたように立派な田舎の風景が広がっていた．それからも，驚きの連続．思い切り斧を振って薪を割っている小学生，鎌を上手に使いこなす５歳，歩くことが精いっぱいそうに見える小さな子も崖を必死になって登っていた．また別の日には，鎌を使って稲刈りして，束ねて，干したり，他の日には，山の中に入って，木々を見比べたり．身近ではない体験の数々に，不慣れながらも新鮮な気持ちで楽しんだ．

けれども，フィールドワークが進むにつれて，な

んだか不安が募ってきた．わたしは，もともと，そんなに山に行ったり，川に行ったりが大好きではなかったからだ．もちろん，今までに経験したことないことばかりで，楽しかった．でも，お世話になった方々は,自然のなかで自然と対話しながら暮らし，何より自然を愛している．このフィールドワークの本質は自然と触れ合うことだけだと思っていたわたしにとって，自分は自然から何に感銘を受けて，何を得ることができたのか.「自然が大好き」と言っている人が周りにいる中でただただ不安だった．

3)気づき

ある日のフィールドワークでは，花木を商品に生まれ変わらせる過程を体験した．山の中にある花や木の実，木の苗や，おれてしまった木などに，自分の創造力をプラスしてインテリアや材料などの商品として販売する．普段気にもしていなかったような自然の産物に新しい価値を吹き込むことは今までにない感覚だった.わたしにとって「そこにあるだけ」の認識だった草花や木々が，誰かの生活を彩るものとしての価値,「商品」として目に映った．まさに，道の脇にひっそりと生えているちっちゃな花に気づけたような気分だった．しかも，正解はなくて，自分の想像次第でいろんなものに生まれ変わらせることができる．さらに，市場で求められる商品づくりを目指すのではなく，自分がいいなと感じるものから,「こう使ってほしいな」という思いを形にしていくということを聞いて,“好き”を貫き，全力になる姿を素直にかっこよく感じた．

ここで，お世話になった人の顔が思い浮かんできた．1 人ひとりから，自然との共存を大切にする姿勢を感じた．しかしそれには，自分に正直に，そして好きなこと，やりたいことを生活の中心に据えるという前提があった．家族との時間を大切にするために都会の追われるような暮らしを捨て，農業の道に進んだ人，脱サラしてずっとやりたかった林業に全力を注ぐ人．しかも，その仕事をわたしたちに教えてくれる時，とても楽しそうだった．本当に自分たちがする仕事が大好きなのだということが伝わってきた．それだけでなく，まじめに語ってくれた．仕事に真剣に向き合っているのだということを強く感じた．自分の気持ちに素直になるということは，自分に嘘をつけないということ．それだけ，自分の行動に責任を持つということなのかなとも感じた．このフィールドワークでお世話になった人達はただ,自然を大切にしていたのではない．自分たちが「大好きな」自然を大切にしていたのだ．そう気づけたとき，少し心のもやもやが消えていくようだった．

4)わたしの”好き“

わたしは，基本的に不器用で，飽きっぽくて，集中力があまりない.「そんなわたしの“好き”って？」…．飽きっぽいわたしがずっと続けているもの．鳥取の伝統文化である「しゃんしゃん傘踊り」.踊る事…？もちろん楽しい．踊りの曲は聞くだけで気分が上がる．こんな美しい傘が鳥取にあるんだよ，とたくさんの人に自慢したいくらいしゃんしゃん傘はお気に入り．一緒に踊る連の仲間たちも，わたしたちの踊りを楽しそうに見てくれる人も大好き．踊りに行った地域のお祭りも好き．わたしが所属する連の代表がイベント先で「じゃあ，今度はうちで踊ってーな.」と横のつながりを広げるのも好き．何より，踊っているわたしも好き.わたしの“好き”.これだ．わたしにはしゃんしゃん傘踊りがある．お世話になった方々が各々の“好き”を貫いて，自然を想うように，わたしもわたしの“好き”に正直になればいい．

5)人の声，自分の声

このフィールドワークを通して思ったことが２つある．１つ目は，人の声を大切にすること．自分以外の人がした経験は，できるだけたくさん聞くことが自分のためになる．今回も，わたしが知らない世界を知っている人に出会って，新鮮な経験をたくさんさせてもらった．普段気にもしていなかったことが自然と目に映るようになった．確実に視野が広がったし，これからの自分を見つめなおすきっかけも得ることができた．

そして,もう１つは,自分の声を大切にすること．他の人はわたしに何を求めているのだろう，わたしのことをどう思っているのだろう，そればかりが気になって自分の気持ちに気づいていなかったかもしれない．しゃんしゃん傘踊りはずっと好き．でも，「できるのは学生のうち．大人になったら，趣味を続けてる場合じゃない.仕事と両立なんてできない．大人になっても続けられている人は特別なんだ．わたしには無理だ.」とあきらめていた．いろんな新しいことを覚えて，たくさんの人と関わって，いっぱい楽しい思い出をため 19 歳になった．でもその分，年を重ねるほどに,「こうしたほうが安泰だから」「こっちのほうが穏便に済むから」と「楽しいほう，好きなほう，やりたいほう」ではなく,「うまくいきそうなほう」をつい選択するようになっていた．こんな人生もったいない．

「人の声を大切にすること」と「自分の声を大切

にすること」は一見して矛盾している．でも，どちらも必要なのだ．欠かしてはいけないのだ．人の声を聞くことができないと無知なままでいいと思ってしまう．自己中心的になる．わたしの世界が単色になる．だからといって，自分の声を大切にできないと，わたしらしさがなくなる．世界から自分色が消えてしまう．何より，面白くない．また，人の数だけ考え方，生き方がある．もちろん好きなモノやコトも.“好き”の対象が同じでも,なんで好きなのか，なんで好きになったのか，どこが好きなのか…，その“好き”の思いは十人十色．自分の声を聞いて，自分の“好き”を大切にすればいい．みんなと「同じ」じゃなくていい．むしろ「同じ」なわけない．でも,「同じなわけない」ことに気づくためにも人の声を聞くことが自分にとって大切になってくる．

こうして自然の中で，自分に素直に，好きなことを貫いて生きている方々と出会ってそう思った．しかも,ただ好きであるだけでは足りないとも感じた．わたしが好きなものについてもっと知りたい．まだまだ私の中には曖昧さが残る．でも，この授業に参加する前のただ曖昧なわたしとは違う．ちゃんと，道しるべを見つけることができたから．熱中できるものがあるのだから，大切にしよう．
わたしの“好き”，を大切にしよう

3. 生命力に溢れた生活　～幸せとは～

藤井純也

1)出会い

私は，机の上で資料を読むだけでは学べないことを求めて，村田先生のゼミを履修した．そこでの体験は私の想像をはるかに上回るほど充実したものだった．体験を通して学ぶということは脳で考えるのではなく，心の中に人の考えや思いが侵入してくるような新たな感覚だった．

海，田，山といった様々なフィールドでそこで暮らす人の営みにふれる中で，私はムークンこと赤堀さんの現場での体験で自分の中で何かが変わった気がした．ここからは，そのことについて書き進めていきたい．

2)繋ぐということ

私たちは，集合場所から２０分ほどトラックの荷台に揺られながら山を登った．その道のりは舗装をされていない，トラックがやっと通れるほどの道幅の作業道であった．山の頂上には，小さな木が植えてあった．この木は２年前に同じ基礎ゼミに所属していた先輩が植えたものだと教えてもらった．それは小さいながらも地面に強くそびえたっていた．木というのは，７０年ほど育ててやっと売れるものだという．つまり，１世代では山で生計を立てることはできないということである．

赤堀さんは何度も繋ぐという言葉を口にされていた．その中で印象に残った言葉は「過去の情景が見えるような山づくり」だった．これは林業ならではの言葉ではないかと思った．この言葉が意味することは，何世代も前の人と木を通して会話をし，関わることができるということではないかと感じた．今の赤堀さんに任せて先人は木を植えた．もし，後生が木をすべて倒してしまえばその想いというのは途絶えてしまう．思いがつながることで成り立っている生業が林業なだということを知った．しかも赤堀さんは８代目だという．８代も続く仕事などあるだろうか．少なくとも私には思い浮かばない．どんなに老舗のお店でも１００年続くとすごいといわれるのに,その何倍も続いている．私は，この職業にどんどん惹かれ，とてもかっこいいと思った．

写真５　先輩の植えた

１００年以上前からその土地に生えている木は戦争を乗り越え,生命をつないだから今の景色がある．私は毎回山に入ると異世界にいるような感覚を覚えた．それは微量ながら私たちにも先人の思いが伝わっているのでははないだろうか．この話を聞いたうえで，もう一度先輩の植えた木を見ると，私たちに人の営みに入り学ぶ意味について伝えてくれているような気がした．

3)生きる力

私たちはその後，実際に伐倒作業を見学させてもらうことができた．現場に到着をすると，赤堀さんは倒す木を瞬時に見極めていた．私は説明を聞くまで斜面に沿って倒すと思っていた．しかし実際は反対で斜面の向かい側に倒すという話を聞いて衝撃を受けたことを今でも忘れない．赤堀さんは日本屈指の伐倒技術を持っているそうだ．私たちはその腕前にふさわしい職人芸を目の当たりにした．赤堀さんはなんの躊躇もなく木にチェーンソーの歯を入れていく．伐倒は，すべてチェーンソーで作業が行われると思っていたが，そうではなかった．受け口を作るとき，追い口に隙間をつくるときに主にチェーン

ソーが用いられる．その後，追い口につくった隙間にハンマーを使いながらクサビを打ち込んでいく．カンカンという独特の甲高い音が山の中に響く．音と共にじわじわと私たちにも緊張感が伝わってくる．5 分ほどすると木はだんだんと斜めになる．最後のカンという音共に力強い音を立てながら木はゆっくりと倒れていく．木が地面について瞬間，ドンという全身を震わせるほどの地響きが緊張した静かな空気を切り裂いた．その感動は言葉にできないものだった．

一通り体験を終えおなかがすいたころに，赤堀さんの家に移動した．赤堀さんの家は茅葺き屋根でできている歴史を感じる家屋だった．そして，そこには赤堀さんの仲間であるカルボさんの姿があった．巻き割り体験，ピザづくりなどを通して親睦を深めた後，対話の時間に移った．さっきまでの楽しい雰囲気とは一転し，緊張した空気が漂っていた．しかし，質問が出ていくうちにその空気は晴れていった．ある生徒がカルボさんに対して，なぜ智頭で活動をしているのかという質問をぶつけた．カルボさんは，山のある暮らしに安心を感じるからと答えた．山があれば水もある，火も起こせる，食料もある．確かにこれ以上ないほどに生きていくために必要なものがそろっている．私は，その豊かさにこれまで気が付くことができなかった．しかし，これまでの体験の中にそのヒントはたくさん落ちていた．生活の場まで踏み入れることで初めて見える景色があったのだ．水があるということはなんとなくそこに行かなくてもわかる．しかし，薪割りで火をおこすというのは，住んでいる人の生活の場に踏み入れなければわからないだろう．確かに，もし電気が止まってもここなら生活ができると思った．赤堀さんの生活の場には，生命力に溢れていると思った．その証拠に，赤堀さんやカルボさんからは自分たちの力で生活ができるという確かな自信があふれ出ていた．

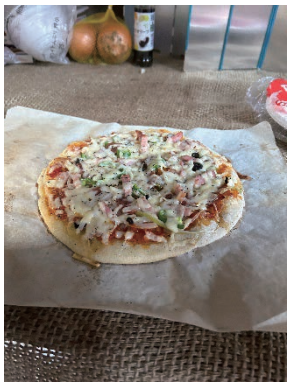

写真６　手づくりピザ

4）幸せとは

私はこれまでお金があり安定した生活を送ることが幸せだと思っていた．だから将来私は地方公務員になろうとしていた．しかし，自分の求めている幸せの形が分からなくなった．そこで，何を求めて今の生活をしているのかという自分の中で率直に生まれた疑問をムークンとカルボさんにぶつけた．すると私の想像もしてなかった角度からの答えが返ってきた．なんと私が最も大切だと思っていたお金が，幸せの必要十分条件ではないといわれたのだ．私はこの話を聞いてはっと気が付かされた．私がフィールドワークに参加をする中で，薄々気が付いていたことが確信に変わった瞬間でもあった．それは，馬耕をしている岩田さんの体験に参加した時から気になっていたことであった．岩田さんも赤堀さんのどちらも，安定した生活を送るためお金を稼ぐことが必要条件になり，家族との時間があまり作れないほど仕事に明け暮れていた．しかし，智頭に移住し自分のやりたい林業や馬耕という職業に従事することでお金が必要十分条件ではなくなった．その結果自分のやりたいことに時間を費やすことができ，自分と向き合う時間，家族と過ごす時間が増えたといっていた．それが結果的に心の余裕につながったといっていた．そしてなにより，現在はこの生活が幸せなのだと心から語っていた．私はこんなにも大切なことに気が付くことができていなかったのだと気づかされた瞬間だった．これからは自分の心が動いた方に舵をとるのも悪くないのではないかと思った．

私はこれまで目に見える外見的なものが幸せだと思っていたけれど，目には見えない内面的なものこそが幸せを形づくるものなのだと気が付けた．これはこのゼミに参加をすることで得ることができた新たな視点だった．私のこれまでの固定概念を崩してくれたし，なにより，これからの自分と向き合う時間を作ろうと思ったきっかけにもなった．

5）フィールドワークの醍醐味

フィールドワークに参加をする中で，心で感じることが多くあった．しかし，心で感じることは，同時に私に多くの疑問を生んだ．その中で，最も自分の中でひっかかった疑問は，持続可能な社会とは過去に戻ることなのかという疑問であった．この疑問が生まれたきっかけというのも，岩田さんの現場での馬耕体験である．

岩田さんは，トラクターなどの機械を使わない農業をしていた．確かに，環境に配慮をしており，ガソリンが枯渇してもできる素晴らしい農業だと思った．けれど，それは人間がこれまで積み上げてきた技術を否定する行為なのではないかとも感じていた．しかし，それは全くの間違いだったのである．岩田さんの農業は，そもそも持続可能な生活を実現する

ために行っているわけではない．自然とともに，動物とともに生活を営んでいくために新たに創造された生活様式だったからだ．そもそも，過去に戻ると私が思い込んでいただけだったのだ．私が信じ込んでいた持続可能な社会とは，現場を見たこともない私が作り上げた捏造の世界だったようだ．こうした気づきは，実際に仕事の場に足を運び，生活や時間を共にし，その人たちの思いを心で感じたからこそであった．いまの私は，こうした自分なりの正解を導くことができる瞬間こそが，フィールドワークの醍醐味だと感じている．まさに，自分の考えがＡからＢに変わった瞬間が,フィールドワークであった．

4. 人材の育成と人間の育み

橋本麗佳

1)わたし

高い学歴を積むこと，いい友人に恵まれること，社会で活躍する人材になること．これが私の幸せであるらしい．学校に行って教育を受けることは，日本人であるだけですべからく補償される権利である．そして，そこで手に入れた能力を駆使して，社会を滞りなく動かすための歯車になることは“正しいこと”であるらしい．私はそれが幸せであると信じてこれまでの 19 年間を生きてきた．不登校は悪いこと，学校に行ってテストで高い点数をとるのは良いこと，私の価値観は学校で育てられた．

私の将来の夢は学校の先生になることだ．たくさんの友人と短い青春をすごせる学校には，いい思い出が沢山ある．今度は私が誰かの思い出の一員になりたいと考えている．学校が好きで学校に行くことが当たり前であった私にとって，インフルエンザによる出席停止や新型コロナウイルスの流行による休校で，学校に行けないことは，退屈でとても苦痛なことであった．そんな私と正反対な，学校に行かない子，つまり不登校な生徒(児童)の存在はニュースなどで聞いたことがあった．しかし，身近には存在しなかったため,「そういう人もいるんだなぁ」という程度の認識であった．いじめられていたり，学校に馴染めなかったり，そういった不登校の原因は，その人が何か重大な問題を抱えているせいなのだと思っていた．そして，教員が彼らのためにできることは，学校に通えるようになるための支援であり，彼らのために一番いいことは，学校に通えるようになることだと信じていた．

2)出会い

10 月 15 日のフィールドワークで，初めて不登校の子と関わりをもった．言われるまで彼らが不登校だとは思えなかった．それくらい，いい意味で“普通の子”だったのだ．不登校の生徒が抱えていると信じていた重大な問題が，存在するようには思えなかった．よそ者の私たちを快く受けいれ，鎌を初めて持つ私たちに鎌の持ち方や稲刈りのコツを笑顔で教えてくれた．誰が早く稲を刈れるかの競争で，負けた人に対して「負けたっていいじゃん」というような声をかけてくれるなど，とても優しい子達であった．私の中の不登校像が少し変わったように思えた．

また，興味深いと感じたのは，彼らのご両親である岩田さんご夫妻が，学校に通っていたことだ．自分が歩んできた道と同じ道を歩むことを子供に強制しないことに，大きな驚きを覚えた．私が彼らだったならば，子供が学校に行かないことを不安に感じ，どうにか学校に行かせようとするだろう．

写真７　とうごうくん

3)正しいこと

2 度目にお会いした際に，学校に行っていないことについてどう考えていらっしゃるのかをお伺いした．学校に行って潰れてしまうよりも，学校に行かず，子供が自分らしく生きていけるのならばそれでいいのではないか，という旨のお話をしてくださった.「学校に行きたい子は学校に行き，サドベリー・スクールに通いたいのならばサドベリー・スクールに通えばいい．そして，学校に行きたくないのなら無理して行かなくてもいい.」という言葉にやはり驚きを覚えずにはいられなかった．繰り返しになるが，私の中での“正しいこと”は学校に通うことであり不登校は悪いことだからだ.しかし，お話をうかがえばうかがうほど，私のモノサシに違和感を覚えずにはいられなかった．カリキュラムで決まりきった学校では，分からないことが分からないまま進められ，もっと知りたくても他の子と同じように進めるために止められる．それが健全な育みなのだろうか？学校が目指す“人材”の育成のため

写真８　ゆずきちゃん

にはそれが“正しい”のかもしれないが，“人材”ではなく“人間”を育てていく場所という捉え方をした時にそれが正しいものと言いきれないような気がした．

4)気付き

私は 19 年の人生の大半を学生として，学校で過ごしている．そして，順調に夢を叶えればこれからの人生も教員として学校で過ごすことになる．学校という社会しか知らずに教師になったとして，学校で育まれたモノサシしかもたない私が“人間”を育てる教育を展開できるだろうか？

・木の枝は折ってはいけません．
・小さな子に刃物を持たせるのは危険です．
・社会のために貢献しましょう．
・SDGs を達成しましょう．

それがなぜダメで，なぜ良いことなのか理由も詳細も知らないが，耳障りのいい謳い文句として並べられたその言葉を“正しいこと”として刻み込まれた私が，私とは違う道を歩んでいく人間を育ててもよいのだろうか？学校で育てている“人材”はラフティさんがおっしゃっていた「より効率よくカーテンを売るロボット」と何ら相違ないのではないだろうか．私は今，大学の講義で“人材”を育成するためのすべを学んでいる．私がしたいことは“人材”の育成なのだろうか．

写真９　ラフティさん

5 回のフィールドワークを通して，自分のモノサシの偏りがあまりにも顕著であることに気付かされた．もちろん学校でしかできない経験も沢山ある．同年代の学友と過ごす時間はかけがえのないものであり，私は学校が好きだ．しかし，学校が好きだからこそ見えていなかったものを垣間見ることが出来たように感じた．私にはやはり不登校の気持ちはわからない．だが，不登校であることは一概に悪いことだとは言えず，教育に対する選択肢が増えてもいいのではないかと考えさせられた．

5)展望

どれだけ考えても不登校であることは悪いことであるのか，学校に通うことだけが“正しいこと”なのか，私には分からなかった．しかし，自分のモノサシの偏りに気づけたことや，学校に対する疑問をいだけたことは，私にとって大きな成長だと考える．私が本当になりたいものは何なのか，学校に行かないことは悪いことなのか，自分の答えを模索し続け，そして，自分が受け持つ生徒たちが私とは違う道を歩むとしても，背中を押してあげられるようなそんな教員になりたいと思った．

5. 自然から学ぶ「人間らしさ」

坪井悠佳

1)初めに

私が鳥取大学地域学部地域創造コースに入学したのは，人口が減り施設や店舗が減っていく地元の町をどうにかしたいと思ったのがきっかけだ．しかし，私は過疎地域に対して，自分たちのやるべきことは新しいものを導入し都会のように住みやすい町に“発展”させることだと思っていた．例えば，IC カードの使えない公共交通機関はそれを導入するべきだという風に．それら考えを全く変えてくれたのはこの基礎ゼミでのフィールドワークである．

2)岩田さん一家

2-1)エンジンを使わない農業

２０２２年１０月１５日(土)，私は初めてのフィールドワークに参加した．県外から進学したため，鳥取市以外にほとんど足を踏み入れたことのなった私にとって，初めて訪れた智頭町の感想は「すごい山の中だ…」だった．この日にフィールドワークさせてもらうのは岩田さん一家の鎌を用いての手作業稲刈りだった．ごく一般的な普通科高校出身で両親は公務員であった私は，全く知らない農業の世界をこの日初めて体感した．しかし令和の今，ほとんどの農家が機械やトラクターを用いて稲作をしていることはもちろん知っていた．わざわざ機械を用いず馬を使った馬耕や，手作業の稲作をどうしてしているのか，疑問に思った．

写真１０(左)刈った稲を束ねる様子
写真１１(右)刈りすぎた田んぼ

2-2)楽しさの根源

「この１面終わらせれたらいいね」と言われた田んぼは１ヘクタールもない，機械で作業すれば半日にも満たない時間で終わりそうな敷地面積であった．しかし，手作業で行う稲刈りは想像を絶する大変さだった．１０月の中旬でありながら日差しを遮る大きな建物もない智頭の山は，カンカン照りで汗が出るほどだった．鎌を使い稲穂を傷つけないよう，無駄に刈り残しが多くならないようなど，教わったことを考えながら稲を刈っていく．途中から岩田家の次男と稲刈り対決に発展し，4列に分かれて刈った．結果刈りすぎてしまった.その後日没までかかった．並んだ稲を，束ねていく作業は永遠にも感じた．後で機械を用いれば刈ったタイミングでまとまって出てくると聞いた時は，さすがに文明の利器に頼りたくなった．私の表情は終始，苦しそうだったかも知れない．しかし岩田さん含め，子供たちは一つもそんな表情をせずに笑顔で作業をしていた．

昼休憩に岩田さん一家とゼミのみんなで「お米とお味噌汁」をいただいた．自分たちが収穫したものではないが，初めて稲作の大変さを体験したので格別の味がした．お話を伺う際にどうして手作業？という質問をした．その理由を私の中のイメージでは環境によいから，地球のためなどと答えられると思っていた．しかし岩田さんの奥さんであるエリさんは「楽しいから」と答えた．それはその日一番の衝撃だった．半日体験してこんなに大変なことを，1 年かけ数年続けている，これが固有の信念や思想によるものではなく純粋な「気持ち」からきているというのに驚いた．エリさんの言う「楽しさ」とは一体何なのだろうか．

2-3)自由な選択

「楽しさ」の正体に触れられかもしれないと感じたのは，自由に生きてほしいという両親の願いから，岩田家の子供たちの中には学校に行ってない子もいる事実を知ったときだった.「楽しさ」の理由には大好きな世界で１つの家族と１度しかない人生の時間を自由に過ごせている，という点からきているのではないかと感じたからだ.皆勤賞を取ることだけを信念に通い切った私からすると，学校のある時間に他にすることが思いつかない．岩田家の次男に聞くと本を読んだり，馬と遊んだりしていた．自然の中でできること以外にも，自分から興味のあること様々に手を出していた．仕事は３歳のころから稲刈りを手伝うようになっていたと聞いて衝撃的だった．岩田家の子供は，勉強以外の大切なことを自ら学べている気がしたし，何より生きていてとても楽しそうだと感じた．パソコンに向き合って勉強したり，友達とオンラインでゲームをしたりデジタルではない生活．今の私たちは自然と暮らすのとは到底かけ離れた，人間の生活をしているのではないかと感じた．古い時代からある技術を後世につなげ，新しいことも取り入れ現代を生きる岩田さんから「人間らしさ」とは何かを考えさせられた．

写真１２　団らんで頂く昼食

2-4)過去と今

１１月３日(土)，前回訪れた岩田さん一家の元を再び訪れた私は,「人間らしさ」とは何かという問いに再び直面することになった.この日の体験は脱穀．脱穀とは，乾燥した茎からもみ殻を外す作業だ．智頭に到着し実際この日使う道具を目の前にしてとても驚いた．そこには日本史の教科書で見たような古い道具があった．調べてみると，足踏み脱穀機は明治時代に発明されたものだった．木製で脆そうだなと感じた脱穀機．実際に使っていると，男子が全力で踏み続けた結果足踏みが外れた．しかも作業はとんでもなく重労働で，私を含む女子のほとんどが足踏みを続けられなかった．なぜこんな古い道具を使うのだろうか．

同じようにこの日体験した“馬耕”．これは人間の４倍近くの力を持つ馬の力を借り田畑を耕すやり方だ．今に農業で馬耕をやっている人口は手で数えられるほどで，ほとんどトラクターなどの比較的近代の発明によってつくられた機械を使っている．岩田さんの言うように，馬は脱穀によってでる藁などの植物をエネルギーに働き，C0２も排出しないことは確かだ．しかし，扱いはとても難しかったし，一度に耕せる範囲もとっても狭い．はじめはこんなにも大変ならばトラクターで良いのにという考えていた．岩田さんから「馬を中心に生活を送る」という話を聞いて馬耕は機械を馬に置き換えるだけでなく，他に重要なポイントがあると知った．岩田さんの生活の始まりは自由で楽しい暮らしのためであったかもしれないが，それらはすべて自然のためへとつながっていた．それは古いものを工夫し使い，今の時代へとつないでいっていた．現代の日本では，過去の発明は古いとされ新しいものこそ素晴らしいとする

風潮があるように感じる．古いものを古いだけと切り捨てることなく，令和の時代も応用してつなげている岩田さん一家に，私は「人間らしさ」を感じた．どうやら私は，デジタル機器に頼ったり自然のないコンクリートに囲まれた生活を送ったりするのを「人間らしい」とは考えていないようだ．

3)自然に生きる

3-1)考え方を残す

「人間らしさ」とは何なのだろうかという問いを抱えたまま，11 月 19 日(土)，私は基礎ゼミ最終日に赤堀さんのもとへ林業体験に訪れた．赤堀家では代々林業を継いでおり，今の代で８代目だそうだ．赤堀家は昭和５年に建てられた昔ながらの茅葺の屋根が特徴の大きな家だった．赤堀さんは最初から家の家業である林業に従事したわけではない．大学卒業後，普通のサラリーマンとして就職した．しかし，「稼ぎよりも，自分が楽しいと思うことを仕事にしたい」と今の生活を選択したそうだ．この林業の仕事に「楽しさ」を感じていて，仕事と思っていないとおっしゃっていた．その“やりたい仕事”は山を守り，林業を守り後世に技術をつなげていくことを赤堀さんは，「やっている人の考え方を残す」とおっしゃっていた．その方法は様々でチェーンソーの技術競技への出場や，私たちが受けたようなフィールドワークなどの授業を通し残していく，それにも私は興味をひかれた．

写真１３(左)脱穀を教える岩田さん
写真１４(右)馬耕を見せる岩田さん

3-2)不安

地球を，環境を守ろうと活動する人は日本中に多くいる．私自身も中高でたくさん地球の環境問題を習ってきたし，考えてきた．しかしこれまでのフィールドワークで出会ってきた大人たちは，「地球を大切にしたい」という理由でその生活を生きてはいなかった．「自分のやりたいこと，楽しいこと」をまず考えていてその結果が，環境を守ることにつながっているように思えた．もし市内で災害があってエネルギー，食物の供給が止まるようなことがあっても，智頭町のこの家周辺はしばらく困らない，という話が印象に残っている．赤堀家の薪を割る広い庭にはたくさんの薪が積み重なっていて，これらを使って生活の「熱」の部分，風呂やストーブを補っているという．ある程度食べ物は自給自足できるし，独立した水道もあるそうだ．

一方，赤堀さんを手伝う林業従事者で，東京都に暮らす親をもつカルボさんは，東京で大規模災害など何かあったときには自分たちは何もできなくなるのではと心配していた．私は全くその通りだと思った．日本は災害大国で，毎年襲ってくる台風や豪雨はもちろん火山噴火や地震それに伴う津波など多くの“いつ来るかわからない自然の脅威“に脅かされている．最近日本人はこれらの災害に慣れきってしまっているのではないか．人間は自然に立ち向かうことはできない，だからこそ人間は自然と共生することが重要であると思う．「自然と生きる」ことが環境を守っていくことにつながることに気づかされた．そして，その気づきは私が問い続けてきた「人間らしさ」に形を与えてくれた．環境保全や SDGｓについて口では何とでもいえるし小さな活動は私もできる．しかし赤堀さんたちも，岩田さんも，出会ってきた大人たちは，好きなことをして生きている．その結果が環境のため地域のためになっている．好きなことをして生きること自体が，環境や地域のためになっていくことも「人間らしい」生き方だと感じた．

4)私たちが考えるべきこと

地域のことを考え何か活動したい，地域復興につながる仕事がしたいと言う地域創造コースの私たち．最初に述べたように，私は，新しいものへの変化・進化することこそが地域にとって，そこに住む人々にとって良いことだと信じていた．このゼミを通して私は「人間らしさ」について考えることになった．この文章のタイトルにもある，自然と「人間らしさ」は相対するように感じる．新しいものにすべてを頼る生活ではなく，自然とともに暮らし古き良きものはつないでいく「人間らしさ」のある暮らし．好きなことをお金より優先させた結果，さらにそれが地域や環境のためになる暮らし．現代社会は自然とは離れたデジタル，コンクリート社会へと進み続けている．今回のゼミでは私は，違った場所で全く違う自由を選択し自然に生きているお二方からそれぞれの「人間らしさ」をみつけた．田舎や過疎地域でも

便利や都会さを求める声は多いかもしれない，そんな中でも古いものや考えを残し，伝えることは重要だ．私は今後の人生でそのことを重視しながら大学で学びを深め，ゼミで関わった大人たちのように生きたい．

6. 営みをつなぐ人々

端野克哉

1)はじめに

今回の基礎ゼミでの活動を通して，営みの中に入り，その暮らしの一部をともに経験させていただく機会を得た．その中で，私の中に新しい視点として生まれたのが，今回の体験を通して出会ったすべての方が持っていた，今・ここで自分自身が行っている仕事や暮らし方を次の世代へとつなぎたいという思いだった．自らの営みを将来にわたって持続できるようにつないでいく．持続可能な社会という言葉はこれまでも何度も聞いてきた．しかしながら，その言葉を素直に受け入れられない自分がいた．持続可能とは何なのか．私の暮らしは持続可能ではないのか，わからない．だから知りたいと思った．その一つの答えが，林業とともにある暮らしの中にあった．林業という仕事自体が過去，現在そして未来が存在することで初めて成立する仕事であったからだ．

2)営みをつなぐこと

林業を体験すると聞いたとき私の中にあったのは，木を切り，その木を製材し，商品化するという林業という仕事のイメージだった．だから，最初に木を切らない林業という言葉を聞いたとき，正直何を言っているのかが，よくわからなかった．木を切らなければ，木を売ることができず，利益を出すことはできない．いくら林業が時間のかかる産業であったとしても，さすがに自分たちが生きるための利益を出すことができないのでは，産業として成立していないのではないか．収入を補助金に頼ってようやく利益が出せる産業を続ける必要は果たしてあるのか．私は批判的な見方をしていたように思う．

しかしながら，山に入り林業に関わる人達の林業という仕事の捉え方を少しずつ理解できたことで，私の考え方が一面的な見方に過ぎなかったことを知った．それは，道のつけ方について教えて頂いた際のことだった，彼らは道をつけるために不用意に木を切らないということをとても大切にしていた．木を切って道を広げれば，大きい機械を入れることが可能で，効率よくたくさんの木を切ることができ，確かに利益を上げることができるかもしれない．しかし，全部切ってしまったら，その山はどうやって雨を蓄えるのか，どうやって風に耐えるのか．また，今ある木を切りつくしてしまったら，２０年後，５０年後といった次の世代の人々はどうやって林業を生業にしていくのか，どうやって木を手に入れるのか．木は過去から引き継がれ，現在という時を過ごしながら未来へと渡していく共有財産なのである．今回の体験で出会った林業者の皆さんは皆そのような視点を持って山と関わっていた．

彼らは決して大規模な形で行う林業を否定しているわけではない，当然そのような林業が適している場所もある．彼らは，日本の山には大型機械を使った林業は適していないとは言わない．日本でも平地に広がる森林での林業では大規模な林業が適していることもある．それどころか，智頭の山での林業には自分たちが行っている方法が一番適しているだという言い方もしない．智頭にも大規模に木を切り，木を売ることで利益を上げる営利を重視する林業を行う企業も存在する．それも否定されることではない．そのような企業が存在するからこそ地域に雇用が生まれ，その地域から出て行ってしまう人を減らすこともできるからだ．彼らがその方法で林業を行うのは，自分が守る尾根や谷にはこの方法が適していると知っているからだ．この山にはこの方法が適しているという限りなくミクロな視点と一種の現実主義に基づき選び取った方法なのだと感じた．そんな彼らは，山を守る山守さんにほかならないのだと感じた．山守さんはその人が守る山を知り尽くしたプロフェッショナルといえる存在であり，その技術は代々受け継がれていく．そして，木にとって適切な環境を木々の適齢期がくるその時まで守り続ける．

ただし，山を守るということは，ただ木の成長を待ち続けるというわけではない．ある現場では，樹齢６０年ほどの木々が伐採され，新たな植林が行われていた．６０年間成長し続けた木々は切り株も立派なものだった．せっかく成長した木を切ってしまうのはとてももったいないことのように思われた．しかしながら，その木はあと４０年たったとして残念ながら高値で売れる木にはなれない．その原因が雪だった．雪による重みに耐えられなかった木々の根元がお辞儀をするように曲がってしまっていた．そのような木々は残念だが切ってしまい，次の良い木々が育つように準備をする．そのひとつにスギからヒノキへと植え替えを行ったということがあった．どうしてそのようなことをしたのだろう．その木々があったのはほとんど山の頂上といえるようなところだった．ヒノキは水が少ない場所の方がよく育つ．

一方でスギは水分が適切にある谷筋の方が適している．つまり，ヒノキの方が適した土地だったのかもしれないのだ．うまく育たなかった木は切ってしまい，次の木へ植え替えてみる．私にはこれが株式投資の考え方に似ているように思われた．どうしてもうまくいかない時には，素早く損切りを行い，次の投資先を考える．その見極めが大切であるというあたりも似ている．でも全然違うところがある．株式投資の利益は自分自身に，そしてすぐに返ってくることが多いのに対して，林業における投資はずっと後になって，しかも自分ではない将来の人々に利益をもたらす．自分ではない将来の世代のことを考えながら仕事をするということはとても素敵なことだと思った．植え替えられた木々は次こそは根曲がりをしないように植え始めから６年程はひもで支えるといった地道な作業を行う．とても手間のかかる作業だ.「この小さい木々は鳥取大学の学生と植えたもの．６０年後この木が立派に育って，有名な建築物に使われたりしたらいいね，切るのは自分じゃないけどね！」そんな言葉とともにほほ笑む赤堀さんの姿は，林業という仕事への使命感と次の世代において木が適切な姿であり続けることを願う，林業者の皆さんの思いを象徴しているように感じた．

木を切らない林業とは，山を守り，山と関わる生活を守り続けること，その木を植えた人々の思いをつなぐことなのだと知った．私は，今回関わらせていただいた皆さんと出会うまで，補助金による支援が必要な林業という見方しかできていなかった．しかし，今回の経験を通して，異なる視点を持つことができた.林業への補助は,一方的な支援ではなく，これからも山を守り続けてもらうために私たちが果たすべき支援なのだと考えるようになった．

3)林業から学び，私がつなげること

林業が過去，現在そして未来において適切に山に関わる人々が存在することによって，初めて成立するということを知ったことは，私の仕事の捉え方に変化をもたらした．その一つが，日清戦争の頃に植えられた木々の伐採現場に行ったときに感じたことだった．約１３０年前に植えられた木々はまっすぐに，そしてどっしりとその場所に根差していた．その貫禄に驚くとともに，この木を植えた人の存在に思いをはせた．きっと，この木々を植えた人は現在の林業の姿を想像することはできなかっただろう．現代の林業は当時の林業とは大きく変わった．木を植えた当時では考えられないほどに木の取引価格は下落していき，木を一本切るだけで，利益を出せた当時とは変わってしまった．社会の姿にも変化が訪れ，生まれた場所で死ぬまで暮らし続けるという選択をしない人も多くなった.そのような流れの中で，林業という仕事をつなぐことは難しいだろう.私は，そのように考えていた．

でも，当時と変わっていないことがあると思う．それが林業という仕事の心構えである．未来へ良い木々をつないでいきたいという信念だろう．当時木々を植えた人は，将来の世代が良い木が使えるようにと木を植え，その木を私たちが使う，そしてまた新しい木を植え,将来へとつないでいく.それは，きっと林業だけにとどまらない考え方だと思う．おそらく，持続可能な社会を目指すという言葉を実践するということは，この考え方を行動に移すことなのだと思う．私は自分の人生は自分だけで完結できるものだと考えているところがあった．でも，そうではないと今感じている．私の生き方が将来に残すべきことがきっとある．その将来へのつなぎ方を模索することが，私のこれからの課題だと思う．

写真１５　林業をつなげる

7．つなぐ

西田こころ

1)はじめに

私は大学での学びの中で「実践」を大切にしたいと思っていた．この基礎ゼミでは，漁業や林業，農業とあらゆる分野の実践の現場に足を運ぶことができる．私は座学ではなく,「実践」でしか学べない学びをしたいと思いこの基礎ゼミを選択した．また，私は大学での学びの中で，様々な地域に足を運び，そこで出会った方たちの生き方や，生活に必要な知恵を，自分が実際に体験することで習得したいと考えていた．私は，外交的な性格で，これまで地域の活動に積極的に参加してきた．しかし，私は自分の思いを他者に伝えることがあまり得意ではない．そのため,基礎ゼミを通して,実践の現場に足を運び，自分が感じたことや，気づいたことを相手に伝える力を身に付けたいと思っていた．

2) 主体性の大切さ

写真１６　馬耕体験

基礎ゼミでは計 6 つのプログラムに参加した．その中でも特に印象に残っている体験は，岩田さん一家と一緒に行った稲刈り体験と脱穀体験である．稲刈りは機械を使わず，鎌を用いて手狩りで行った．また，脱穀作業も，足踏み脱穀機と言って人が常に踏み続けていなければ作業ができない機械を使って行った．岩田さんの 5 人のお子さんも作業に参加していた．

私は幼い頃から両親が共働きで，両親が仕事をしている姿を見るきっかけがなかったため，私の仕事に対するイメージは「なんとなく忙しくて大変なもの」という捉え方だった．そのため，岩田さんご家族のように，子どもたちが両親の仕事している姿を見ることができたり，一緒に体験できたりすることは，私にとって異様な光景だった．

私が岩田さん一家を見て驚いたことは，子どもたちが主体的に動く姿である．農業をやらされているのではなく，自分でやりたいと主体的に動く子どもたちの姿は生き生きしていた．また，3 歳の子どもまでも鎌を持って稲刈りを行っていた．子どもにとって危ないからと，何もかも否定してしまうと子どもの成長する機会や，様々なことにチャレンジするチャンスを奪ってしまう．そのため，子どものやりたいことは極力やらせてあげたいと岩田さんは語っておられた．岩田さんの農業体験は，みんなが協力し合って行わなければ終わらせることはできない．子どもにとって，誰かと協力して作業をすることで，信頼関係を作ることができたり，我慢する忍耐力を身に付けることができたりと，生きる上で大切な力を身に付けることができると私は感じている．農作業をしている子どもたちは，年齢が近いこともあり，喧嘩してしまうことも多々あった．鎌の取り合いで，2 人の子供が喧嘩をしていた．しかし，お互いが謝って，順番に使おうと譲り合っている姿を見かけた．喧嘩を見ている周りの人たちが止めなくても，幼いながらに自分たちの頭で考え，困っている人や，苦しんでいる人を見て，自分が何をすべきなのか，行動し，仲直りできる子どもたちの姿は大人びて見えた．また，岩田さん夫婦が作業している姿を見て，子どもたちも真似をしたり，手伝ってあげたりしている姿も何度も見かけた．人が成長するためには，主体的に考え行動する力や，相手を思いやる気持ちが大切なんだと改めて実感した．また，仕事の大変さは自分で体験してみないとわからない．

3) 子どもの成長

写真１７　馬と子ども

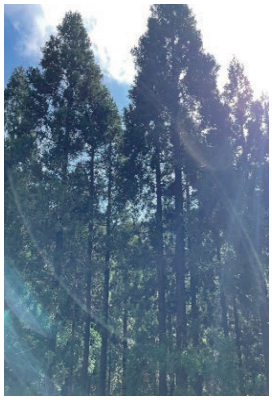

写真１８　赤堀家の木

岩田さん一家は，子どもたちを含め，自給自足の生活を志していた．岩田さんの子供たちは，幼いころからその生活を当たり前に行っていた．私より 1 周りも歳が下の子どもたちが，稲の狩り方や火の使い方を私に教えてくれた．その子どもたちの表情は笑顔で得意げでかわいかった．

私は岩田さんのお話を聞く中で，子どもの成長を見る時間は取り戻せないからこそ，親にとって子どもと過ごせる一瞬一瞬がとても大切だということを学んだ．「お金は足りなくなったら，どうにかして稼ぐことはできても，子どもの成長を見届ける時間は取り戻せない．保育園の先生が見ることのできた我が子の成長を，自分が見れないのは悔しい．だから，日々子どもたちと関わる中で，子どもの成長を見たい」と岩田さんは語っておられた．その語りから，手段よりも，親と子どもが一緒になって活動することに，私は意味があると感じた．それが岩田さんの場合は，農業だっただけである．ただ，子どもが自分たちで考え，行動できる場と，親の愛情を受け，子どもたちが生き生きと過ごすことで，自分のやりたいことを突き詰めていくことができる場を作ることに意味があり，大切なのだと感じた．また，基礎ゼミを通して関わった子どもたちの言動を見て，自分の知らないことを知った嬉しさや，人と関わることで身に付けた知識や成長する姿を見れたように感じた．こうした，日々の子どもの成長をそばで見れることは，親にとって幸せな時間なんだろうなと実感した．

私は今，実家暮らしをしている．部活やバイトで，

両親と話す時間をなかなか作れていない．また，課題や部活，バイト漬けで，寝不足が続くことが多くあった．また，友達と遊ぶことが増え，家に帰る時間が高校生の頃に比べ，少なくなった．そんな私を両親は心配してくれていたようだが，あまり口出しをされなかった．岩田さんも「子どもには好きなことをやってほしい．子ども自身で学んでいってほしい．子どもを信じてあげることが大切.」と言われていた．私の両親も同じように思っていたからこそ，自分のやりたいようにやらせてくれていたのだろうと感じた．今まで，本当は，私に言いたいことたくさんあったはずなのに，黙ってくれていた両親のことを考えると胸が苦しくなった．今は，子どもたちと作業することが楽しいし，大変だけど頑張れる．だけど，自分も歳をとって農作業をできなくなったり，子どもたちと一緒に活動したりできる時間も少なくなってしまうかもしれないと岩田さんは語っていた．それを聞いて私は，自分の両親や自分の身に少し不安を感じた．だからこそ，今後の人生は自分のやりたいことに全力で向き合っていきたい.また，これから先，両親と過ごす時間を大切に，自分の成長する姿を見せられるよう頑張っていこうと思った.

4)人とのつながり

基礎ゼミを通して出会った方々に共通して言えることは『つなぐ』ということを大切にしているということだ．岩田さんも，子どもたちが農作業をすることで，農業の大変さや大切さを学んで，将来，子どもたちが受け継いでほしいという思いがあると語っていた．また，最初に行った定置網漁では，定年退職をし，その後に第二の人生として漁の仕事を行っている方々ばかりであった．中には，20代の方もおられた．漁の担い手は減ってきているため，若い担い手が必要であるということ．自分たちが習得している漁での知識を自分たちの代で終わらせるのではなく，次世代に受け継いでいきたい．そうすることで，自分が引退した後も，地域の人の生活を守ってほしいと船長は語っておられた．漁業を次世代につなぐことで，水産資源や沿岸域の環境保全につながるだけでなく，地域の基幹産業として人々の生活を支えることが持続的に可能になるのである．私は，定年退職された後に，漁の仕事をされている方々ばかりだということを知り，歳を重ねても，自分の好きなことに取り組んでいる方々の姿や，地域のために朝早くから漁の仕事をされている姿はかっこいいと思った.

写真１９　水揚げの様子

林業をされている橋本さんは持続可能な地域を目指し，林業をされていると語っておられた．林業は木をたくさん伐採すれば稼ぎになる．しかし，木を伐採することで，地球温暖化や大気汚染などが起こり，地域の人の環境を壊してしまう．そのため，木を“残す”という手法をとることで，未来につながる林業を行っていきたいと語っておられた．林業をされている小谷さんは，市場の求める木材を採取するのではなく，自分が価値を感じるものもお客さんに提供したいと語っておられた．誰かのニーズに合わせたものを採取するのではなく，自分の思考も大切に，次世代につないでいくことはとても大切なことだと感じた．私は日常生活において，自分の思いを相手に伝えることや，相手が自分の思いをくみ取ることは難しいと思っている．しかし，小谷さんのお話を聞き，林業は先祖たちの思いを受け継ぎ，その思いを残していきながら，その中でも自分のやりたいことを行っていると知った．林業を強制的にやらされているのでも，お金を稼ぐためにやっているのでもなく，自分がやりたいことを表現するための媒体であるということを私は基礎ゼミを通して気づいた．また，お客さんはどう使うかではなくどう使ってほしいか考えながら採取する時間はきっと充実した時間だと思う.自分が努力して採取した素材が，誰か“のお気に入り”として家に飾られることは，採取した側にとって幸せなことだと感じた．赤堀さんも次世代につなぐということを大切にされていた.赤堀さんは「将来の人類が困ることのないように，自分が次世代につなげるようにすることが，今の時代の使命」だと語っておられた．その使命を果たすためには，横のつながりがとても大切だそうだ．どの仕事に就いたとしても，自分のやりたいことに賛同してくれる仲間や，支えてくれる仲間の存在は生きる上で必要だと私も感じている．特に林業や漁業などは危険と隣り合わせの仕事であり，仲間の協力や賛同なしではこなせない仕事だと思っている．自分が何かをしようとしたとき，応援してくれる仲間の存在は，大きな励みとなると感じている.

5)幸せのかたち

基礎ゼミで出会った方々は，家族・仲間・先祖・次世代とともに生きているからこそ，仕事に対して

前向きに捉えていたのではないだろうか．また，私は，基礎ゼミで関わった方々の，「自分の幸せだけを考えるのではなく，家族・仲間・先祖・次世代とともに生きる」という信念に，とても感銘を受けた．実践を通して得られた知識や経験を積み重ねていくことは生きる上でとても大切な学びだと思う．それは，座学では学べない．実際に自分が体験したことで身に付けられるものだと感じている．実践で身に付けられた力や，人とのつながりは，人が成長するうえで，重要であり，自分の思い出として記憶に残る大切なものになるだろう．基礎ゼミの実践で得られた知識や，人とのつながりは私にとって，とても貴重で，充実した時間となった．

8. 生き様・自然からの学び・気づき

塚本莉奈

1)はじめに

私は，高校生の時，学校の授業の一環で地域調査を行ったことがある．実際に地域に出て，地域の方々にお話を伺い，地域について考えた初めての経験だった．この活動を通して，地域のことを地域の方々と共に考えることに楽しさや遣り甲斐を感じた．そして，大学では，フィールドワークができる環境で，地域のことを学びたいと考え，鳥取大学に入学した．「フィールドワーク」という言葉に惹かれ，基礎ゼミでは，村田先生のゼミを志望した．そして，５つのフィールドワークに参加させていただいた．どのフィールドワークも学びや気づきが多く，非常に濃い時間となった．

2)学び・気づき

2-1)自分に素直に生きること，「楽しい」という気持ちを大切にすること

今回フィールドワークで関わった方々全員に共通していることは，自分に素直に生きていること，「楽しい」という気持ちを大切にしていることだと感じた．

半導体をつくる会社に勤めていたが，子どもとの時間を大切にしたいという思いから脱サラし，現在，智頭で手作業によるお米作りを行っておられる岩田さん．岩田さんの元で手作業での稲刈りと脱穀を体験させていただき，こんなにも時間がかかり，手間であるのに，なぜ機械に頼らず，手作業にこだわるのか，私には不思議だった．しかし，作業を共にする中で，そこには「楽しい」という気持ちがあるのではないかと思うようになった．

写真２０ みんなで囲むご飯

稲刈りを始めたころは「楽しい」という気持ちだったが，お昼ごろには作業に時間がかかることへの驚きと疲労の方が勝っていた．しかし，お昼ご飯に岩田さん一家が作った新米やみんなで持ち寄った材料を使ったお味噌汁を頂いたが，手作業の大変さを知った後のご飯は，いつも以上に感謝の気持ちを抱くとともに，「頑張って良かった」，「お昼からも頑張ろう」という充実感とやる気が生まれた．午前中，少しだけ関わらせていただいた私でさえ，そのような気持ちになったため，田植えからずっと手作業でお米作りをしておられる岩田さんは，どれほどの充実感を感じているのだろう．食べ物のありがたみをいつも以上に感じたが，手作業の大変さを強く感じた私には，「楽しさ」を感じることはできなかった．しかし，岩田さんを見ていると，楽しそうに稲刈りをしたり，楽しそうに学生や先生と話をしたりしていた．また，自分が好んで手作業をしているというお話や自分の気持ちに素直になって，勇気のいる脱サラをし，生活を一変させたというお話を伺った．これらのことから，岩田さんは自分に素直に生き，「楽しい」という気持ちを大切にしておられると感じた．

写真２１ 稲刈り中の田んぼ

さらに，岩田さんのお子さんたちを見ていても，それを感じることができた．私たちが師匠と呼んでいた息子さんは，学校のやり方が自分には合わないから，学校に通っていないと言っていた．私はそれを聞いた時，義務教育であるのに，なぜ親は学校に行かないことを許しているのか不思議に思った．岩田さんは，義務教育という決まりを理由に子どもの自由を奪うことなく，自分に素直に生きられるようにしていると感じた．また，子どもたちは木の枝とロープで遊び道具を作って遊んだり，穴を掘って遊んだりと，市販のおもちゃではなく，自然の中から「楽しさ」を見つけていた．岩田さんは，自然の中

で自由にさせることで，その中から「楽しさ」を見つけさせていた．このように，岩田さん一家と共に稲刈りや脱穀をし，２日間フィールドワークをさせていただく中で，岩田さんは子どもたちにも自分に素直に生き，「楽しい」という気持ちを大切にさせているのだと感じた．

その他，智頭でそれぞれの林業をされているラフティさんやようたさん，赤堀さんの元にフィールドワークに行き，共に過ごしたり，お話を伺ったりしたことから，自分に素直に生き，「楽しい」という気持ちを大切にしておられるように見えた．私には，彼らの姿が輝いて見え，このような生き方に憧れを抱いた．

私は高校時代，安定が一番だと考え，公務員を志望していた．しかし，大学に入学してから，講義を受けたり，地域活動をしたりする中で，安定を選ぶか，わくわくを選ぶかで悩んでいた．だからこそ，彼らの姿が輝いて見え，彼らの生き方に憧れを抱いたのかもしれない．自分に素直に生き，「楽しい」という気持ちを大切にし，好きなことを生活の軸にしている彼らの姿を見て，私もこのような生き方をしたいと思った．もちろん，生活のためには安定も大切であるが，それよりも自分の気持ち，特に「楽しい」という気持ち，「好き」という気持ちが大切だと気付くことができた．自分に素直に生きることは決して簡単なことではない．だが，非常に大切なことである．就職だけでなく，これからの人生において，自分に素直に生き，「楽しい」という気持ちを大切にすることで，より良い人生を歩みたい．

写真２２　自作の遊び道具で大縄跳び

2-2) 仲間の大切さ

智頭で林業を営んでいる赤堀さんのお話の中で，「横の繋がりを大事にすれば，自分のやりたいことができる」という言葉が印象に残っている．「3 人寄れば文殊の知恵」という言葉があるように仲間を大切にし，その繋がりを大切にすることが重要だと改めて感じた．私は２つの学生団体で地域活動に参加しているが，その中で仲間の大切さを感じる場面が多々ある．特に，商店街にお店を出店している団体での活動の中で，それをよく感じる．私は商店街など，地域にある資源を活用することが必要だと考え，大学に入学したら，商店街に関わる活動を行いたいと考えていた．しかし，何から始めたらいいのか，どのように協力を求めたらいいのかわからず，何も行動できないまま時が過ぎていた．そんな時，ある先輩から商店街のプロジェクトを立ち上げるけれど，一緒にやらないかと誘われ，参加することにした．お店のコンセプトをどうするか，内装をどうするか，どのような商品を提供するかなど，メンバーと意見を出し合い，お店をオープンした．この活動をする中で，仲間がいるからこそできることもあると気付かされた．私は複数人で活動するより，1 人で活動する方が，効率が良いと考え，集団行動を好んでいなかった．しかし，仲間がいることで商店街にお店に出店することができたことから，赤堀さんの言葉が胸に響いた．

写真２６　ラフティさんと村田先生

私は何でも自分でやろうとしてしまう性格であり，仲間に頼ろうとしない．その性格のせいで，自分自身が苦しくなってしまうことがあった．しかし，この言葉を聞き，仲間を頼ることも必要だと感じた．

これから先の人生で，人間関係で悩むことや１人でつまずくこともあるだろう．そんな時は，この言葉を思い出し，仲間を大切にし，そして仲間を頼ろうと思う．

2-3) 知らないことが多い

知らないことが多いとフィールドワークを通して感じた．稲刈りや脱穀の知識，林業の知識，木の知識，花の知識など，知らないことだらけだった．さらに，花木生産を行っているようたさんのもとにフィールドワークに行き，知っていた林業とは異なる，林業の新たな形を知った．ようたさんのもとにフィールドワークに行く１週間前には，同じく智頭で林業を営んでいるラフティさんのもとに，３週間後には，赤堀さんのもとにフィールドワークに伺った．ようたさんの山とラフティさんの山，赤堀さんの山がほとんど同じところにあるとは思えないほど，景色が違って見えた．ラフティさんと赤堀さんは木を伐倒し，運んで，売るという典型的な林業であったが，ようたさんは枝やコケを採取して売るという林

業も行っておられる．それを実際に体験すると，山の見方が一気に変わった．典型的な林業では，周りは背の高い木しか目に入らなかったが，花木生産では，山が宝の山に見えるほど，素敵な枝やコケが目に入るようになった．このような林業の形があることを知って，知らない世界が多いことを実感した．

また，鳥取のことでも知らないことが多いと感じた．私は鳥取県出身だが，今まで，林業に触れたことは一度もなかった．そして，智頭を訪れたこともなかった．このように，鳥取のことを全然知らなかったり，鳥取の中でも訪れたことのない場所があったり，また，鳥取のことが好きだと感じているが，どんなところが好きなのか具体的に言うことができなかったりすることに気づいた．地域のことを学び，将来地元で地元のために働きたいと考えている学生として，鳥取のことを知る必要性を強く感じた．そのため，現在，「鳥取巡り」と題して，同じく鳥取県出身の地域創造コースの学生と共に，鳥取県内の全ての市町村を巡り，鳥取のことを知ろうという計画を実行中である．鳥取県内の全ての市町村を制覇することは，時間はかかるが，可能であろう．しかし，鳥取のことを全て知るには，何年必要だろうか．きっと何年経っても，知らない世界があるだろう．だからこそ，「楽しさ」を感じることができるのだと思う．今回フィールドワークで関わった方々が感じている「楽しさ」には，知らない世界を知ることの「楽しさ」も含まれるのではないかと感じた．また，そこに仲間がいるからこそ，さらに「楽しさ」を感じたり，新たな気づきがあったりと，より楽しく知らない世界を知ることにも繋がると考える．鳥取のことを知るという意味で，全てを制覇することは難しいと考えるが，鳥取の良さを感じながら，そして“楽しみながら“，鳥取のことを知っていきたいと考えている．

写真２４　みんなで集めた木の枝の数々

写真２５　岩田さんとふくのすけ君

3)まとめ

このように，５つのフィールドワークに参加させていただき，多くの学びや気づきを得た．まず，自分に素直に生きること，「楽しい」という気持ちを大切にすることが重要だと学んだ．「やりたい」や「楽しい」などの自分の気持ちに嘘をつかないことで，人生がわくわくに溢れた豊かなものになると学んだ．さらに，仲間がいることで，１人ではできないこともできると知った．そして，知らない世界が多く存在していることに気づいた．今回，フィールドワークで関わった方々が感じている「楽しさ」には，知らない世界を知ることの「楽しさ」，わくわくも含まれるのではないかと感じた．また，そこに仲間がいることで，できることが増えたり，新たな気づきがあったりするのではないかと思う．

写真２７　伐倒中の赤堀さん

写真２８　説明する洋太さん

今回，初めてフィールドワークに参加したが，私の想像していたフィールドワークとは異なっていた．フィールドワークとは，地域に足を運び，地域の方にお話を伺い，地域の行事に“観客”という立場で参加するものだと考えていた．しかし，村田先生が行っておられるのは，見て，聞いて，体験するというフィールドワークであった．実際に参加してみると，学びだけでなく，自分自身を見つめ直すことにも繋がり，自身の成長にも繋がると実感し，フィールドワークの大切さ，意味を再認識した．高校で地域活動を行ったことで，地域に興味を持ち，実際に地域に出て学ぶフィールドワークがしたいという思いで大学を選んだ．しかし，実際には，難しさがあった．正解がないからこそ，難しさがあるのではな

いかと思う．これまで述べてきたように，今回のフィールドワークを通して，多くの学びや気づきがあった．このように，地域を学ぶ上で，やはりフィールドワークは欠かすことができないと考えるし，見て，聞いて，体験するフィールドワークが必要不可欠であろう．今後も積極的にフィールドワークに参加し，地域を見て，聞いて，体験し，学び，そして自分自身を見つめ直したい．

今回のフィールドワークで得た生き様・自然からの学びや気づきを，これからの人生を生きていく糧とすることで，お世話になった方々への恩返しとしたい．

9. 未知の自然

米花海輝

1)はじめに

私は，この村田ゼミのフィールドワークで多くのことを見て，聞いて，感じて学んだ．このフィールドワークで学んだものは，私の知り得ない地元鳥取の一面から学んだものである．どのようなことを見て，聞いて，感じて学んだのかを本レポートに述べていく．

2)天に任せた漁

2022 年 10 月 12 日（水），私は鳥取県鳥取市青谷町の夏泊に訪れた.まだ夜のような暗さで家を出て，早朝５時に鳥取大学に集合した．私にとってこの授業が初の漁業体験になるため，とてもワクワクしていた．私はサーフィン部に所属しているということもあり，10 月に入ってから海が時化て波が高くなる日が増えたのを実感していた．この日も，港に行って海を見てみないと漁ができるかわからないという状況で，漁ができることを願って夏泊の港まで足を運んだ.港に着くと，陽気な船長に「海に出れるが，よう荒れとるぞ,」と言われ，船酔いをする覚悟を決めて着々と出港の支度をした.この時に感じたのが，漁師さんは雨風や波の高さ，潮の流れなどを操ることは到底できず，すべてを天にお任せしているということだ．まるで漁師さんは神様に決められたように海に出るのであった．いざ出港し，堤防によって波が立たない港を抜けると，船は大きく揺れた．今回漁をする船は，幅が大きく作業がしやすくなっているが,その反面で波やうねりの影響を受けやすい．どこかにしがみつくか，座るかしないと海に落ちてしまいそうな揺れの中で，どんな魚に出会えるかを楽しみにして定置網の現場へと向かった．

3)操業・選別・出荷

定置網の現場に到着すると，漁師さんたちの顔つきがガラッと変わった．船員各自がするべき仕事を把握して黙々とこなしていた．私は，漁師さんたちが操っている定置網の規模に驚いた．定置網は直径何十メートルもあり，とても人間が船一つで操れるようなものではないと思った．それでも漁師さんたちは素晴らしい連携プレイを成し，一体化しているようであった．怒号のような合図が飛び交う中で漁師さんたちが手際良く作業している空気に触れて，私は漁業が本当に時間との勝負であるということを身に染みて体感した．時間をかけて定置網を引いた後に，クレーンと大きな網を使って定置網の中の魚を船内の生け簀に移す作業を何往復も行った．長い作業になったが，この日は大漁ということもあり操業が終わると漁師さんたちは上機嫌で港に戻へと向かった．

写真２９ 鱸と村田先生

港に戻り，地に降りた時の安心感は忘れられない．船酔いをしていたこともあり，人間は間違いなく陸の生き物であるということを痛感した．魚の選別台を準備すると選別作業がすぐに始まった．定置網漁船が帰船した港は，村に住む高齢者たちが一人，また一人と集まり賑やかになっていく．獲れた魚を大きさ別や種類別に分けていく選別作業は，最初はとても難しく感じられた．魚のサイズを見分けられなかったからである．しかし，不思議なことに時間が経つにつれ，無意識にサイズを判断し手が勝手に動きはじめる．迷いなく無心に選別する作業はとても楽しく，時間が過ぎるのが早く感じられた．

すべての魚の選別が終わるとすぐに出荷作業に取り掛かった．魚の重さを量る人，発泡スチロールに氷を詰める人，リフトを操作し運搬を行う人などに役割が自然に分担されていき，気づけば大量の発泡スチロールに魚が詰められていく．出荷作業で目に留まったのが，女性や高齢者の作業への積極的な参加である．その中には，ご高齢のため船を降りられたが，陸での選別・出荷作業を一生懸命行うおじいさんの姿があった．この場には，定年退職までは無

理してでも働くといった現代社会では当たり前の風習は存在せず，彼らにとっては働ける間は何歳までででも好きなように働くだけのようであった．彼らが年齢にとらわれず働き続けることができるのは，彼らの先祖が働けなくなるまで漁業に関わり続けたその背中を見て育ったからであろう．高齢者たちにとって無条件の居場所があり，自らの今後の生活について選択できることは，現代社会においてとても幸福なことではなかろうか．私はここに真の福祉があるのではないかと考える．漁業では天に従った漁を行い，生涯を通して漁業に携わるといった生き方を先祖から受け継ぎ，未来・後継者とつないでいた．また，その生き方が最大の福祉となり彼らの人生を豊かにしていた．

4) 山に入る

2022 年 10 月 22 日（土），私は鳥取県の智頭町に訪れた．私は，漁業と同様に人生で林業という職業に携わったことがなく，胸が高ぶるとともにその過酷さに不安を抱いていた．この日は，昼過ぎにかけてゼミのメンバーで火を起こし，起こした火を使って昼食をとった．そして午後から山に入った．火起こしでは，苦戦しながらも火をつけることができた．そして，スイッチ一つで火をつけることができる現代の技術が恐ろしく感じた．

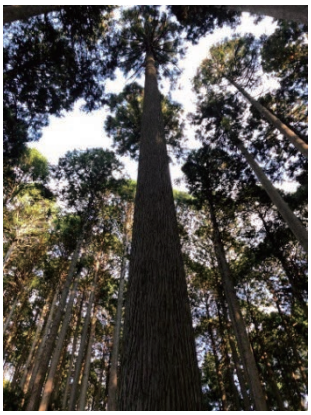

写真３０ 百年生林

昼食を食べ終わり，ヘルメットや足袋などの安全装備を装着すると，軽トラに乗り林業が行われている現場に移動した．軽トラから降り，急な斜面を勢いよく上った先に見えたのはとても美しい杉の人工林であった．木は急斜面でも空に向かって真っすぐ伸びており，日常的にこのような場所で作業を行う林業の過酷さを思い知った．同時に，その木々を見るととても清らかな気持ちになった．

林業の主な仕事内容として，「地ごしらえ」「植栽」「下刈り・つる切り」「枝打ち・除伐」「間伐」などがある．今回は，「枝打ち」や「間伐」について，作業を行う理由やその効果について詳しく説明をしていただいた．「枝打ち」は，商品価値を高める「無節」という状態をつくるためやまっすぐ綺麗な木を作るために行う作業であり，「間伐」は，森林の茂りすぎで木の強度が落ちないように，木の成長に合わせて価値の低い木から間引いていく作業である．しかし，間伐のしすぎは禁物のようだ．間伐をしすぎると，木が風に煽られた時に木と木が支え合うことができず，木の繊維が傷ついて強度の弱い木になってしまう．上を見て木と木の間が大きく開けすぎていないことが適度な間伐の目安のようだ．

講師であるラフティさんのお話を聞いていく中で，ラフティさんが山主でないことを知った．山主でなくても林業ができるのか，というのが私の率直な感想であった．それは私が，林業を始めるには山を購入し，自らの山を手掛けていくというイメージを持っていたからである．林業従事者の中でもラフティさんは山守と呼ばれる人であり，他の山主さんの山を大切に維持する仕事をしているようだ．さらにお話を聞く中で，林業の収入の６割が行政による補助金で賄われているということを聞き，自分の耳を疑った．それほどの補助を受けないと採算を維持することが難しいという現状があることを初めて知った．それでも，ラフティりをして後世につないでいこうとラフティさんの姿はかっこよかった．

5) 自然からの糧

2022 年 11 月 19 日（土），私はまた鳥取県智頭町に訪れた．今回の講師は，ラフティさんと同様に林業を営む赤堀さんである．赤堀家の方は先祖代々林業をされており，いくつかの山を所有されている．まず，その中の一つの山の頂上へ訪れ，二年前に先輩方が植林された檜を見た．私は，二年経ってこの大きさなのか，と驚いた．木の成長スピードは私が思っていたよりはるかに遅く，太く大きな木を育てることは一人の人間が生きている間には到底成し得ないことを思い知った．現場を変え，70～80 年生の立ち木を切り倒す伐倒を見学することになった．伐倒は，まず木をどの方向に向かって切り倒すか目標設定を行い，次に目標に体を向けながら受け口をつくる．そして，追い口を入れてくさびを打っていく．赤堀さんがくさびを分厚いものに変えながら打っていくと木は少しずつ傾いていき，ドォーンと倒れて地響きが鳴った．その迫力は鳥肌が立つほど凄まじいものであった．その倒れた木には赤堀さんの先祖が込めた多くのの思いが詰まっており，この伐倒の場面に立ち会えたことを光栄に思った．赤堀さんは，自分だけの代で終わらせないためにも後世に誇れる山をつくり後継者への期待を良い木で示したい，とおっしゃっていた．

赤堀さんが大切にしておられる言葉に「切ったら植える」というものがある．この言葉は，先祖が大切に育ててきた木の一部をありがたく頂き，頂いた分は新しく植林して子孫に残していく「恩送り」を意味する．林業では，自分の代のことだけを考えて木を切れば大儲けをすることは可能である．しかし，それでは後継者や子孫に木を受け継いでいくことが不可能となる．だから未来に生きる人たちのこと考えて山を守っていく必要があるのだ．過去から受け継いできた思いを未来へつなぐ，林業は前任者から受け継いだ

写真３１　伐倒をする赤堀さん

山に対する考えや思いが後継者に伝わるからずっと続いていくのだろう．

6)つなぐ～過去から未来へ～

今回のフィールドワークのプログラムを通して，学校の座学では学べないことを多く見て，聞いて，感じて学んだ．私たちは普段当たり前のように陸から海を眺める．しかし，船に乗り浮かびながら周りを眺めると，陸が見え私たちの生活の営みを違う視点からみることができる．私たちは普段山を見ると緑のかたまりとして捉えてしまう．しかし，実際に山に入り，一本の木に触れるとその大きさや重みを感じることができる．つまり，物事の実態に迫るには想像力を膨らませ主観的あるいは客観的に見る必要があるということだ．今回訪れた漁業・林業の現場の方々はこの想像力を持ち，活かしていた．その中でも強く印象に残っているのは,“過去から受け継いできたものを未来つなぐ”ということである．それは漁業でも林業でも感じられた．漁業では，天に任せて命を頂き，仕事を生活の一部にするといった生き方を受け継いでいた．林業では，現代に生きる自分たちの利益だけを考えず，前任者から受け継いだ木を丁寧に管理し，次の後継者につないでいこうとされていた．

今回のフィールドワークでは，過去から現在，現在から未来へと一本の線のように思いや生き方が受け継がれてつながっていくことの重要性を学んだ．私は，現実をありのままに受け止めて過ごしていたが，現実として受け止めているものの背景にはどんな真実や原理があるのか想像するようにしたい．そして，過去への感謝と未来への考慮を忘れず生きていきたい．

10.「なんとなく」のつながり ～夏泊の漁師に学ぶ～

諸道竜馬

1)船上で目にした光景

１０月中旬の早朝，私は漁業を体験するために夏泊の漁師の方の漁船に同乗させてもらった．船に乗った直後から私の予想していた「漁師」のイメージは壊された．漁師同士ではほとんど会話がなかったのだ．漁場につくまで全員が終始無言で海を見つめていた．かなりの時化だったが全く動じる様子はない.漁場についても無言のまま各々が持ち場につく．ここでも指示はほとんど出さず，魚が入っているであろう網を見つめている．そして巨大な網が徐々に手繰り寄せられるとおびただしい数の魚の姿がだんだんと浮かび上がり，その魚が立てる水しぶきによってあたりはまるで霧雨が降っているかのようだった.漁師たちは慣れた手つきで巨大な網を操り,次々と魚を掬い上げていく．ここでも少し言葉を交わす程度で，全体に対して指示を出すことはない．さらに驚いたことに，それぞれが状況を見て空いた持ち場を埋めるようにして移動していた．各自に固定の役割があるわけではなく，周りの空気を読み取りながら自分がすべきことを探しているのだ．魚を網から船に揚げる最中には，当然網をすり抜けて逃げようとする魚も見られた．しかし，漁師たちはたとえそれが５０センチを超える大物だったとしても捕まえようとはしない．視界には入っているはずだが，気に留める様子はなかった．大量の魚をものの３０分ほどで船に揚げると，船は港に戻った．港に戻ると，そこには明らかに漁師ではない人たちが集まっていた．私たちが魚の選別を始めると少し離れた場所から何をするでもなくそれを見つめている．中には一緒に選別を行う人もいる．

選別作業がひと段落したのち，昼食の時間となった．そこでも私は驚かされた．漁師たちは，集まって談笑しながら食事をとる人と一人で黙って食事をとる人とに分かれたのだ．普段の学校生活の中でこれらの光景を見たとしても何ら不思議はないが,「漁師」という魚をとることを生業としているコミュニティの中に入ってこの光景を見ることに，私は大きな驚きを覚えた．

2)漁師から学んだ「つながり」の在り方

2-1)「なんとなく」の美しさ

この私の驚きは，私に人と人の「つながり」，そして人と自然の「つながり」について考えさせてきた．あそこにあった「つながり」は，私が思い浮かべるような「つながり」ではなかったからだ．私はこれまで「つながり」という言葉を聞くと，作業を効率よく進めるために協力したり，行事があると一つの目標のために共同作業を行うような学校や職場での「つながり」を思い浮かべていた．しかし，漁師の間での「つながり」はそれに比べて非常に緩やかだ．言い方を変えると，「なんとなく」のつながりだ．「なんとなく」周りの状況を読み解いてすべきことを考え，「なんとなく」漁の様子を見，「なんとなく」選別を手伝う．そして作業がひと段落すれば，「なんとなく」分かれて食事をとる．また，自然に対してもそのような姿勢は見受けられる．逃げようとする魚を貪欲に追うことはないし，魚が大漁であってもそれは自然が大漁にしてくださったと考え，誇るようなこともしない．

この曖昧なつながりからなるコミュニティのなかに，私は懐かしさと心地よさを感じた．もちろん漁師の方々とは初対面であるし，たくさんの会話をしたわけではない．では，なぜ懐かしさや心地よさを感じたのだろうか．それは，祖父母の家で過ごしている時の感覚と非常に似ていたからだ．私は幼いころから祖父母の家で過ごすのが好きで，現在でもよく訪れている．私は，世間一般に言われる「コミュニケーション能力」が低い．口下手であり，自分の意思をなかなか伝えきれないこともよくある．しかし，祖父母といるときにコミュニケーション能力の低さゆえに困ることはほぼないし，特に言葉を交わさなくてもある程度の意思疎通は行える．「なんとなく」の空気感で伝わることが多いのだ．また，祖父母の家は海と山に囲まれた漁村にあり，自然との距離が非常に近い．だからこそ自然に対して怒りもしなければ極端に喜びもしない．大雪が降ったとしても「まあ，しょうがない」といって雪かきを始める．端から制御できるものとして自然をとらえていないのだろう．このような心の持ちように，私は知らず知らずのうちに触れていたことに驚くと同時に，非常に面白いものだと感じる．

この「なんとなく」のつながりの在り方は，現在ではあまり良しとされないものだろう．コミュニケーションについてはそれが顕著に表れている．現に，鳥取大学でも会話を通じたコミュニケーションによって互いの考えを深めたり，国際的な理解を深めるというグローバル化に対応していく姿勢がみられる．これは日本中の学校や企業などの組織でもそうだろう．たしかに言葉による積極的なコミュニケーションは国際化が進む社会では必要不可欠なものであるし，私たちが就活をする際にも必ず求められるものだ．しかし，それだけでは人は生きていけないだろう．そこには心地よさが欠けている．現在の社会は，曖昧なものを消していくような傾向にあると思う．１か０かというデジタル的な処理が浸透し，それはコミュニケーションにも及んでいるが，不明瞭ではっきりしないものがあってもよいと私は思うし，私たちにはそれを選ぶ権利がある．そもそもコミュニケーションに良し悪しなどない．自分が生きていくために必要な方法を選べばよいと思う．そう，漁師たちは語りかけてくれたように感じた．

2-2)「街にあるものは，街にあればいい」

この体験を通して，身近にあるつながりの心地よさや面白さに気付くきっかけが生まれると同時に，生き方についても考えるようになった．以前，私は将来，都市部の大学に進学し，安定した職に就くのだろうという思い込みがあった．人生における優先順位が金銭や生活の安定であり，無意識のうちに都市部での生活が絶対的なものだと思い込んでいた．都市部のほうが利便性も高く，職も多い．だが，私が訪れた夏泊という小さな漁村には，美しい「なんとなくのつながり」があった．それは，都市部で多く見られる「無関心」に裏付けされた曖昧さではなく，人と人，人と自然がそれぞれ溶け合い共存しながらも，互いに適度な距離を保っている．だからこそ，曖昧でありながら揺るぎないつながりを保つことができるのだ．「岳」という漫画の主人公の言葉に「街にあるものは，街にあればいい」というものがあるが，まさにその通りだと感じる．その土地の一員として，経済的・物理的な安定とは違うところに心地よさを見出せるような生き方を選択してもよい．のだと後押しをされたように感じた．

付記

本稿は，鳥取大学地域価値創造研究教育機構地域連携推進室令和 4 年度地域実践型教育活動(地域連携授業)の教育成果の一部である．